12　　良少将の妻の嘆き　　　　　　　　　　　文法　注意したい訳し方の助動詞②

読解　具体的心情をつかむ

新傾向　関連資料との相違点をつかむ

天皇が亡くなった後、天皇に仕えていた良少将（後の僧正遍昭）は、家族に何も知らせず、出家する決意を固める。

「①法師にやなりにけむ、身をや投げてけむ。法師になりたらば、さてあるとも聞こえⓐなむ。身を投げたるなるべし」と思ふに、世中にもいみじうあはれがり、どもは世間の仏神に願をたてまどへど、㋐音にも聞こえず。妻は三人ⓑなむありけるを、㋑よろしく思ひけるには、「なほ世に経じとなむ思ふ」と二人には言ひけり。かぎりなく思ひて子どもなどある妻には、②ばかりもさるけしきも見せざりけり。このことをかけても言はば女もいみじと思ふべし、③我もえかくなるまじき心地しければ、寄りだにで、④にはかになむせにける。⑤「かくなむ思ふ」とも言はざりけることのいみじきことを思ひつつ泣き入られて、のにこの妻まうでにけり。

* 語注

世に経じ＝この世に生き続けるつもりはない。出家の意思を示す。

かけても＝少しでも。

初瀬の御寺＝奈良県桜井市の初瀬の。

【原文】

「法師にやなりにけむ、身をや投げてけむ。法師になりたらば、さてあるとも聞こえなむ。身を投げたるなるべし」と思ふに、世中にもいみじうあはれがり、妻子どもは世間の仏神に願をたてまどへど、音にも聞こえず。妻は三人なむありけるを、よろしく思ひけるには、「なほ世に経じとなむ思ふ」と二人には言ひけり。かぎりなく思ひて子どもなどある妻には、塵ばかりもさるけしきも見せざりけり。このことをかけても言はば女もいみじと思ふべし、我もえかくなるまじき心地しければ、寄りだに来で、にはかになむ失せにける。「かくなむ思ふ」とも言はざりけることのいみじきことを思ひつつ泣き入られて、初瀬の御寺にこの妻まうでにけり。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

姿を消したまま見つからない良少将に対して人々は、「〔　　　　〕になったのか、〔　　　　　　　　〕たのか」と思い、同情する。良少将の妻は〔　　　　〕いたが、その中でも〔　　　〕までなしながら、何も言われなかった妻は、悲しみのなか〔　　　　　　　　　　〕に参詣した。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ（㋑は終止形でよい）。〈４点×２〉

㋐〔　　　　　　　　　　〕　㋑〔　　　　　　　　　　〕

問三　二重線部ⓐ・ⓑの説明として最も適当なものを選べ。また文法的に同じものを１～４から選べ。〈３点×２〉

ア　強意の助動詞「ぬ」＋推量の助動詞「む」

イ　動詞の活用語尾＋推量の助動詞「む」

ウ　願望の終助詞「なむ」

エ　強意の係助詞「なむ」

１　いつしか梅咲かなむ。（更級日記）

２　かたちよりは心なむまさりたりける。（伊勢物語）

３　男、「都へ往なむ」と言ふ。（伊勢物語）

４　飛び降るとも降りなむ。（徒然草）

ⓐ〔　　　〕〔　　　〕　ⓑ〔　　　〕〔　　　〕

問四　傍線部①・④を現代語訳せよ。〈４点×２〉

①〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

④〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問五　傍線部②の理由として最も適当なものを選べ。〈６点〉

ア　最も信じた妻であるので、何も言わなくてもわかってくれると思ったから。

イ　最も大切に思っていた妻に反対されてしまうと、新しい道に進めなくなるから。

ウ　最も愛した妻の悲しみに触れると、自分の決意も揺らいでしまうと思ったから。

エ　子どもまでなした妻からなじられると、自分も激しく動揺してしまうから。

〔　　　〕

問六　傍線部③は良少将のどのような気持ちを表しているか。最も適当なものを選べ。〈６点〉

ア　自分の思いを、妻にすべて打ち明けたい気持ち。

イ　妻への気遣いから、法師になることをためらう気持ち。

ウ　妻への思いが募り、死ぬことを思いとどまる気持ち。

エ　出家を望むあまり、妻を疎んじる気持ち。

〔　　　〕

問七　傍線部⑤とあるが、女はここではどのような気持ちでいるのか。三十字以内で答えよ。〈10点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問八　次の【資料】は『遍昭集』の一節であり、本文と同じく仁明天皇が亡くなった後の良少将の様子を描いている。本文および【資料】を比較して述べた説明として適当でないものを一つ選べ。〈６点〉

【資料】

　りし深草の帝かくれおはしまして、変はらむ世を見むも堪へがたくかなし。蔵人のの中将などいひて、夜昼馴れ仕りて、なからむ世に交じらはじとて、にはかに家の人にも知らせでに上りて頭下ろし侍りて思ひ侍りしも、さすがに親などのことは心にやかかり侍りけむ。

（注）　深草の帝＝仁明天皇。

　　　　蔵人の頭の中将＝天皇の側近に仕える蔵人所の長官。

　　　　比叡＝ここでは、比叡山延暦寺のこと。

ア　本文では、帝と良少将との関係がまったく描かれていない一方で、【資料】では、「蔵人の頭の中将などいひて、夜昼馴れ仕りて」とあるように、帝に親しくお仕えしていた故に深い悲しみを感じる良少将の姿が表されている。これにより、本文では、帝への忠誠心よりも三人の妻に対する良少将の思いに重点が置かれていることがわかる。

イ　本文では、三人の妻に対してなかなか真意を伝えられないで苦悩する様子が表されている一方で、【資料】では、「家の人にも知らせで」とあるように、誰にも自身の心の内を知らせることなく「にはかに」いなくなった良少将が描かれている。これにより、本文のほうが、三人の妻に対する良少将の思いをより丁寧に描いていることがわかる。

ウ　本文では、出家のも聞かず夫が身を投げたのだろうかと心配する妻子の様子が描かれている一方で、【資料】では、「比叡に上りて頭下ろし侍りて思ひ侍りし」とあるように、良少将が出家したという事実が淡々と表されている。これにより、本文では、出家のことに関わって妻への思いに揺れている良少将の心理描写が重要なものとなっていることがわかる。

エ　本文では、三人の妻たちに対する良少将の対応がそれぞれ示されている一方で、【資料】では、「さすがに親などのことは心にやかかり侍りけむ」とあるように、親などのことを気にかける良少将の様子が描かれている。これにより、本文のほうが、それぞれの妻への思いの違いに焦点をあてた心理描写となっていることがわかる。

〔　　　〕

【解答】

問一　法師／身を投げ／三人／子／初瀬の御寺

問二　㋐＝うわさ　㋑＝だいたいよい・悪くはない〈４点×２〉

問三　ⓐ＝ア・４　ⓑ＝エ・２〈３点×２〉

問四　①＝法師になってしまったのだろうか、

　　　④＝突然身を隠してしまった。（突然姿を消してしまった。）〈４点×２〉

問五　ウ〈６点〉

問六　イ〈６点〉

問七　夫が真意を告げないまま姿を消したことをひどく嘆く気持ち。（28字）〈10点〉

問八　イ〈６点〉

【現代語訳】

「法師になってしまったのだろうか、 身を投げてしまったのだろうか。法師になったのならば、そのようであると（いううわさ）もきっと聞こえるだろう。やはり身を投げたのだろう」 と思うと、世間の人々もたいそうかわいそうに思い、妻や子たちは世間の仏や神に願を立ててうろたえるが、うわさにも聞こえない。（良少将の）妻は三人あったが、悪くはなく思っ（てい）た［＝ふつうに愛していた］（二人の）妻には、「やはりこの世に生き続けるつもりはないと思う」と（良少将は）二人（の妻）には言った。このうえもなく愛して子どもなどがある妻には、（良少将は）少しもそのような様子も見せなかった。このことを少しでも（良少将が）言うならば女もたいそうつらいと思うにちがいない、自分もこのように（出家することが）できなくなるだろう（という）気持ちがしたので、（良少将は彼女の所には）立ち寄ることさえしないで、突然身を隠してしまった。 （妻は夫が）「このように思う」とも（自分に）言わなかったことのひどく悲しいことを思ってはつい泣き沈み、初瀬の長谷寺にこの妻は参詣した。

【資料】現代語訳

　お仕えしていた仁明天皇が御崩御あそばして、変わるであろう世の中を見るようなこともやりきれなく悲しい。蔵人の頭の近衛中将などといって、夜も昼も（いつでも、天皇のおそば近くに）馴れ親しみお仕え申し上げていて、（今さら）すっかり変わってしまうであろう御治世の中に立ちまじる気はないと思って、突然に家人にも知らせないで比叡山延暦寺に上がってしましてつくづく思いましたが、そうは言ってもやはり親などのことは気がかりだったのでしょうか。

【補充問題】（＊行数は本書に対応）

問１　「さるけしき」（５行目）とはどのような「けしき」か。答えよ。

問２　「この妻」（7行目）とはどの妻のことか。本文中から抜き出して答えよ。

【補充問題解答】

問１　良少将が出家しようと考えている様子。

問２　かぎりなく思ひて子どもなどある妻